

200部、40冊-2冊

大正18年 2冊同出

○ 読心 事 17 巻心

@360. ¥72,000

荒 就 駕

第十天号

瀧田 周子 著

福国大学 書道部

十五周年 記念号

卷

頭

語

出 発 の 詩

人生に目的なんかない
始まりだけである

どんなにえらい哲学者が

人生の目的をでっちあげたところで

子供の「なぜ」という可愛い一言で

その哲学者の研究は

哀れにも崩れ去ってしまう

イデオロギーも嫌いだ

イデオロギーはいつも

それを信じていた人間を裏切る

人生に目的なんかない

だから人間は泣くことを覚え

笑ってごまかすようになった

歩いているのではなく

歩かされているような不安

動いているのではなく

動かされているような不安
そんな不安ばかりつづける

山のむこうに

幸せなんか無いことを知り

カール・ブッセは泣いたそうだが

私なら

笑いながら歩いていく

これが

私にとって生きるということ

目的なんかないけれど

笑いながら

淡々として

歩いていこう

たんたんとして歩いていこう

きつと

何かが

見えるに違いない

北山 修

目次

| | | | |
|--------------|--------|-------|-------|
| 序 | 十五代幹事 | 山村昌次 | 4 |
| 目次 | | | 3~2 1 |
| 巻頭語 | | | |
| ハワイアンギターをきいて | 書道部講師 | 赤木石掃 | 5 |
| この頃 | O B | 原博之 | 6 |
| 今思うこと | O B | 山口達也 | 7 |
| 「一筋の光」 | 法学部一年 | 結城健 | 8 |
| 喜びの人生 | 商学部一年 | 八尋厚子 | 8 |
| 「友達」 | 経済学部三年 | 入江美智子 | 9 |
| 部活動にはいつて | 商学部一年 | 中島恵子 | 10 |
| 私の書道部 | 人文学部三年 | 隈田ひとみ | 11 |
| 「書道部に入部して」 | 理学部一年 | 柴田亮子 | 11 |
| 自己否定から他者否定 | 経済学部三年 | 山村昌次 | 12 |
| 「書道部に入って」 | 経済学部一年 | 高倉潔 | 12 |
| 書道部の中の自分 | 法学部二年 | 松本健一 | 13 |
| 大学生になって感じたこと | 薬学部一年 | 宮崎由起子 | 14 |
| 「私の書道観」 | 経済学部二年 | 上田浩三 | 15 |
| 「書道部入部の動機」 | 経済学部一年 | 嘉村浩之 | 16 |

| | | | | |
|-----------------|-------|--------|----|----|
| 「僕のサウンド」 | | 経済学部四年 | 末 | 16 |
| 書道部に入って感じた事 | | 人文学部一年 | 川原 | 17 |
| 「私の書道部」 | | 法学部四年 | 石川 | 18 |
| 福大ノそしてクラブノ | | 法学部一年 | 小柳 | 19 |
| 「私が求めたもの」 | | 商学部四年 | 佐野 | 19 |
| 書道部に入部して | | 経済学部一年 | 飯尾 | 20 |
| 茶柱が立った時 | | 法学部三年 | 荒尾 | 21 |
| 「若い時」 | | 経済学部四年 | 河野 | 22 |
| 「乱」 | | 経済学部三年 | 大庭 | 22 |
| 書道部に入部して | | 経済学部一年 | 高尾 | 23 |
| 大学に入って | | 人文学部一年 | 増山 | 24 |
| 福書連について | | 経済学部二年 | 野端 | 25 |
| 南の二局で思った事 | | 法学部四年 | 押越 | 26 |
| 「出会いと愛」 | | 法学部二年 | 黒田 | 27 |
| 私のサークル観 | | 経済学部三年 | 南 | 28 |
| 『学書』 | | 商学部四年 | 宮崎 | 28 |
| 部員のプロフィール | | | | 30 |
| 広告 | | | | 34 |
| 規約 | | | | 37 |
| 昭和五十年 福岡大学書道部役員 | | | | 41 |
| 編集後記 | | | | 42 |

序

福岡大学書道部も今年で創立十五周年を迎え今日ここに「荒鷲」十五周年記念号を発刊できますことは誠に慶びにたえません。書道部も十五年前、この世に産声を上げ、今日まで成長してまいりました事は、諸先輩方と現役学生の努力の賜物だと確信致します。また合わせて、西日本高等学校揮毫大会、福岡学生書道連盟も十五周年を迎え、今年十二月中旬には、青少年文化会館に於きまして「福岡大学書道部十五周年記念展」を開催の予定です。書道部にはいま尙、成長発展の前途に数多くの問題を残しております。何卒今後とも惜しみない御指導をお願い致します。

書道部十五代幹事

山 村 昌 次

ハワイアンギターを きいて

赤木石掃

昨日の晩だった。万町の山道歯科医院で、ハワイから買って来たと言うハワイアンギターのレコードを聞かせていた。驚いたことに本場のハワイアンは、日本のそれのように、あくどく、うならない。実にたんたんとひろびろと明るくおおらかにるのである。日本のハワイアンは猫が死んだかと思うと生きかえつてもう一度うなつて見せる式の嫌味たつぷりのうなりである。一体これは何に起因するのだろうかと考えて見ながら、ハワイ旅行の話を書き出した次第。山道さんも、昨冬はカナダに御家族一家でスキーに行かれ、私はその雄大さをきいて感心したり羨望したりしたものだ。それで今更観光客まがいなハワイなんぞには行く予定はなかったのだ。うだけれど、団体客の客席をうめる為に無理にすゝめられて、気のすゝまないハワイ旅行六日に参加したそう。今頃はやりのうかれ観光客でないことは私は充分理解していたにもかゝらず山道さんの話には胸をうたれた。まずタバコのスイガラが落ちていないと言ってお話しに驚いた。車の窓からタバコをすてると後方の車がナンバーを警察に知らせると罰金が八千円。日本でそんなことをしたら警察がいそがしくなつて、人件不足でお手あげになることだろ

う。又海岸が美しいと言う話におどろいた。日本の海。私共の知っている志賀の島や生の松原、唐津の海岸を思い出して見た。コーラのビン、お菓子の箱、かんづめのあきかん。それはそれは大変である。紙屑一つおちていないそう。道路は寝ころんでもいい位にきれい。公園でも灰皿や吸い殻入れのあるところに行つて火をつける。ところがそこに日本人の観光団がやつてくる。芝生ならんで休憩。まずタバコに火をつける。吸い殻入れはあろうとなかろうとそんなことには関係ない。席を立つたあとを見るとそのきれいだったところは、たちどころにタバコの吸い殻と紙屑の山。と言う話。それから彼等（外国の人）はホテルでも、知らない人がニコリはほえんで挨拶をする。何ともやさしい心持ちだそう。ハワイアンの音はそのまゝ彼等の広々とした気持ちと素直さをあらわし、彼の町の町は、自然を愛する心使いで、美しさが保たれている。その奥にあるのはその人達の人柄である。

帰宅すると女房が腹を立てている。今日通りすがりの人が家につけてきて、車庫の水道の栓をかくれと言うのだそう。あとで車庫において見ると白い可愛いマルチーズのお尻に臭いものがかかりくつついていたそう。多分それを洗つたに違いないが、あとで行つて見ると水道の栓はそのまゝ、そして車庫の前は、なにやらついた紙切れが散乱していたそう。まず人に迷惑をかけないように自分を磨きながら、やさしい気持ちで、自分の周囲を見てゆきたいと思つたひとときでした。

皆さんのクラブの活動も大変活気を呈してきた。然し自分だけよければいいと言う態度では、いい人間になれない。お互い、親切でやさしく、思いやりのあるクラブであつてこそ、本当によい字が書ける「人」になり得るのだと思つたことだ。年寄りのヒヤ水かも知れない。

昭和五十年六月二十日・記

こ の 頃

O B 原 博 之

こんなことを思います。

僕はこの頃つくづく、青春の総決算をしなけりゃならない年頃になつたんだらうかと。四畳半のこの部屋で、真夜中にたくろを聞きながら、タバコをふかしながら、窓を見れば空では星がキラキラ！ なんていうセリフを吐くには、ちよつと年齢をくつちまつたんだらうかと。ワイセツな含みも考えないのに話した男女のことをしゃべれば、「まあ、いやらしい。」と幾つも年齢の差のない方はおっしゃるのです。付き合いで、酒を飲んで大いにハッスルすれば、同僚は「お前、大分ストレスたまつとるな。」と。周りはどうあつても僕に青春をやめろと言っているようだ。街を歩いていたらちよつとカワユイ女の子に目をやれば、「あれは若すぎるノ」……「あれはどうかだ。」と同僚にいわれ又目をやれば、一見オバサン風、く

そ、勝手にしる俺の青春、とそう叫ばずにはおられない。

そんな日々です。

でも僕の上を年月だけはたっていることはほんとです。毎日水城の山を下ること二十五分、駅まで急ぎ足に、思い出が頭の中をかすめます。

☆

恋愛・書・友人・就職・家庭という問題が四年の頃いちどに押し寄せてきました。どれひとつ解決もしない。納得もいかない内に大阪へ着いて、或る日、中小の商社でソロバンはじいている僕でありました。昭和四十四年、三月です。毎日砂を噛むような……という言葉をこの年齢で初めて実感としてわかつたんですね。孤独に、友人からの便りに返信さえ出さなかつた程、心は冷えていました。それから一年半がたちましたが、結局、体をこわして帰郷した時はさすがに嬉しかつたですね。！ 今僕は毎日が平安です。

友人は少しずつ若さが消えてゆくけれど、そして話題も乏しくなるけれど、いつもそれで飲もうノということに落ちついて、ネオンの下をどじょうみたくにフラリフラリするんです。それでも友情というアルコールに醒めることはありません。社会は！ 飲んでなくても飲んだふりしたり、おかしくもないのにおかしい顔したり、こんな処世の術も教えてくれました。けれども決して恨んじやおりません。希望の星もたくさん消えてしまいましたが、楽しいこともごちそうになりました。おかげさんで僕はいつも愉快です。今日も又一日、バカチョカやつて、バカチョカ騒ぎます。

☆

からたちの とげは

いたいよ

いたい いたい

とげだよ

(白秋)

完

今思うこと

O B 山口達也

大学四年間に取り組んで、今こうして書の道を歩いてゆくと、ほんとにほんとに翁臭いじじ地味なものをやっているものだなあとつくづく思います。 さつそく書きます。

古典を勉強するということが、これはほんとにほんとに大切なことだと思います。書家でない人でも字の上手な人はたくさんいます。しかし、書道を根底に勉強している我々は、この古典というものは絶対忘れてはいけません。字のつくり、字と字の関係、字の四季感など素直に法帖を見つめてゆく。今僕のやっている古典は集字聖教序です。やはり、一点、一画、打ち込み終筆などじっくり見て書くことは大事ですが、あんまり細かい所に気を配り過ぎて全体にまで目

がとどかないといけない。僕が思うのには、臨書をするということでは、作品を作る方向にもってゆくための基礎となるものです。それでいつも頭に作品ということを忘れてはならない。だから一字一字の形、一画一画の強弱、そこを見なきゃいけない。作品というのは一字一字の運動の集まりです。

だから一字一字、自由自在に四方八方に動かせる力を持たんといかん。つまり一画一画の生かし方、効かし方が重要なものとなってくる。こういうことが解っていたら何も臨書しなくても自分で書けるような気がします。それで古典とか必要ないように思って、法帖をそつちのけで作品というものを作ってみました。しかし、一生懸命考えてみたものの、どうもカッコウが悪くてガタガタでした。それでも一度古典を見直すと、カッコウが良く無理なことはしてなく、字が動いていて落ちついているんです。結局、自分じゃ解っているようでも全然できない。そういうことで、古典を勉強することは自分自身大事だと思いました。戦前(昔)と戦後(今)の書についてちょっと書いてみます。どちらの時代でもやはり古典を勉強するということは同じです。昔と今の大きな違いは、昔は室内作品であつたが、現代は展覧会場作品という風に作品のスケールが大きく(大衆向きに)なつたということである。それは西洋との交流によりいろんな空間芸術というものが伝わり、作品構成というものが、白と黒との調和、点と線との関係、形の変転、白に対応する黒の密度の大きさ、白を切る線の長短、線そのものの感情、或いは墨その

ものの味わい。様するに空間を切る色々な点と線との関係という風
に変わってきた。だから現代書道の代表作家、村上三島、青山杉雨、
墨象作家と云われる手島右卿、前衛書家の上田桑鳩、宇野雪村など
が出てきたわけです。こういう移り変わりが解って二十一世紀の書
作品というものを考えなきゃいけない。それは日展で書道が一番最
後五科に芸術として認められてはいるが、洋画などと対等に行く位
の力を持つということ。いつも悔しいと思うことは、以前テレ
ビで日展の入賞作品について話されていたが、出てる者は美術評論
家とか画家といった連中である。でそういう者が書を批評したり、
陶芸を批評したりしている。これを見ていて何故書家が出ていない
のかどうもわからん。それだけ書は芸術として取り上げられてはい
るものの、ほんのちっぽけな存在しかないのである。書は書だけで
あつてはならない。絵画などと対等に話せる、また絵画を真正面か
ら批評できる力を持たないかんと痛感した。これからの時代はそう
なくては行かない。墨芸術家にならんと。みなさん 負けんめい!!

「一筋の光」

法学部一年 結城 健

僕は、いつの間にか希望の地へ通ずるといわれている真つ暗なト
ンネルの中に立っていた。

気持ちと和らげてくれる小鳥や花が、その時の自分には見えな
かった。

僕は、ただ、その希望の地を目ざして、自分ではそのつもりで、
一カ月余り歩いてきた。たとえ一人であっても、いくつもあるこの
ようなトンネルを歩き通してしまえばいいのだ、と思っていた。
でも、ある時、僕は一筋の光を見つけ、ぐいぐいと引かれた。そ
して、光のもれる扉を開け、その中に飛びこんだ。

今では、その光に囲まれ、このトンネルを明るく照らしながら歩
いている。これからも、ずっと、この光に囲まれ、その一部となっ
て歩こうと思う。

はつきりではないが、遠くに花や小鳥が見えるような気がする。

喜びの人生

商学部一年 八尋 厚子

何も書くことがないので、去年一年間、遊んでいた時に思ってい
たことを記してみようと思います。

どうしてそんなに急ぐのですか？ 長い人生、急いでも仕方がな
いじゃありませんか。じだんだ踏んでも時の流れは止められない。
昼寝をしても、食事をして、話をして、時間も勝手に流れてくれ
る。のんびりしようではありませんか。ゆつくりと飯の味を味わっ

て、ゆっくりと一日というこの時間の流れを楽しんで、そして人生は、こんなに楽しいんだと、身いつぱいに感じようじゃありませんか。目の前の虚栄に踊らされて、なんて日本人は、かわいそうなんでしょうか。もっと喜びのある人生はあるはずです。そう思って、のんびりと、そして着実に一日を過ごして行こうではありませんか。

日の出頃、木立の元の露草に

名も無き滴り、ただ一つ

静かに流れて、けなげにも

斜の葉もとに進みたる

道のあるなし問はずとも

天の定めし通り道

けなげにけなげに歩んでる

明日は何処か

今日のみの

今果しつる道なやむ

流れて涸れて済みゆく身

今この道歩かんか

「友 達」

経済学部三年 入 江 美智子

友達、それは今まで私が必要でないと思っていたものの中の、実はとっても大切で、ありのままの私を鋭く批判し、又慰めてくれる私の心の片隅に潜む大きな支えである事を知りました。

それは、或る強化練習の期間中の事でした、私は皆に一生懸命について行こうと、何枚もの紙を山の様に積む程費やし、又根気の無い私の尽きてしまう程の力を尽くして、今度は変化を付けて、今度は墨付けを工夫して等しい、挙げ句のはてには、あせる心を押さえようにも押さえきれなく、自分の力なさに絶望し投げ遣りになってしまい、友達に「書道部で、一番下手でいくら練習してもうまくいかない。」と愚痴を言ってしまっただけでした。当時は入部して一カ月程だったと思われるが、そんな言葉に友達は「当たり前じゃない、最近入部したんだもの、これからうまくなる為に入部したんでしょう」と、素っ気ない、冷酷な、単調なその一言でした。

この言葉に対し、対する言葉もなく、ただハッと心の中をそつとのぞき、心の動揺をそつと友達に悟られない様に静めようと、勤めるにすぎませんでした。

それは、私に対する激しい批判のようにも、又慰めの様にも感じ

られ、ただ私は不思議に心がなごむ思いでした。

その単調な言葉には、今まで私の耳にした悪口でも、又肉親の言葉でもなかった様でもあるし、もしかしたら悪口そのものであるかもしれないし、又肉親の言葉でもあるかもしれないとも思えました。それには、肉親の甘やかしを乗り越えたいという優しさがあり、又肉親にも似た優しさ、それは、肉親の様な限りない優しさではないけれど、ひとりっ子の私にとっては、他の兄弟という肉親を持っている人の様な、その肉親に対する寄り掛かりの様に思えるのでしょうか。その肉親でもなく、又全く異なった個々の人間としての接点には、時には、色々な事があり、離れていたいとさえ思う事もあります。しかし、いつのまにかそこに居るのです。そんな友達に会えた事を又、そんなクラブを選んだ私自身を賞讃したいのです。

皆さん一諸に、がんばりましょう。

部活動にはいって

商学部一年 中島 恵子

私が、今思っていることを一言で言えば、「入部してよかった」ということです。

中学時代、体育系クラブで、高校時代には文化系のクラブに所属していることに抵抗を感じて、一年足らずで退部した私です。

文化系クラブには、縦のつながりばかりで横のつながりがない、つまり、礼儀ばかりでうちとけた面がないように思えたのです。しかし、友人の話しを聞くと、そのようなことはなく、うちとけた面もあるということでした。このことを聞いたのは、二年も終りの頃でしたので、また入部することはできなくなっていました。友人が、クラブのことを話しているのを聞くと、うらやましくて、退部したことを後悔しました。

後悔しながら、私にはクラスの友の他に、またその中にも友達と呼べる人が何人いるだろうか、上級生、下級生と親しく会話したことがあるだろうか、と私の交際範囲を考えてみると、クラブにはいつている友人に比べると、ごく狭いのです。言い換えれば、人間の幅の狭さにもつながるのです。私の高校生活は、登校、授業、下校だけの毎日で、何の思い出もないのです。それで、大学ではクラブ活動してみようかなと思いました。

入部して約一カ月。正直に言って、まだ、クラブが楽しいとは言えません。しかし、部室に入って先輩達と話してみると、練習の時と違った雰囲気があります。これは、私が高校時代に味わえなかったもので、いいものだなあと思っています。そして、クラブを通して、いろいろな人を知ることができるのは、私にとってプラスになることを期待しています。

私にとって、クラブは、学生生活の一部になります。勉強だけでなく、クラブ活動も学生生活に必要なかと思えます。

この思いを忘れずに、四年間頑張ります。

私の書道部

人文学部三年 隈田ひとみ

書道部!! というと、初めは、まじめで、かしまつていて、かたいクラブだと思っていた私。今でも、そういう風に感じる時が、しはしはあります。でも、それは、書道を通じての部員の人達の共通点や、また、サークルというものの厳しさなどを感じた時など、特に思うようです。今までの私は、何だかとおつても、宙ぶらりんの状態だったように感じます。かといって、今は、どうだという事でもなく、平凡に暮らしているみたいです。

大学に入学して、三年目に入りました。つまり、書道部で、まる二年間を送ってきました。今、ふり返つてみると、やはり平凡であったかもしれない。けれど、いろんな事があり、悩んだり、苦しんだり、また喜んだ事、楽しかった事、いろいろありました。考えてみると、文字を書くのが、全く苦手な私が、大学生活の四年のうち約半分を、このクラブで過ごして来たのは、何か魅力があったからです。そこで出るのが、人間関係です。書道部の人達は、とっても良い人達ばかりです。みんな、一人一人、個性があつて、すばらしい人達ばかりです。その人達の良さがあるから、やはり、私は、

そこに立ち止まっているみたいです。卒業して、何十年か後に、また、みんなと会いたいな。なんて、時々、思つて、一人で笑つたりしています。

これから先の自分は、わかりません。だけど、書道部員として、過ごして行きたいと思えます。雲一つない青空のように、すがすがしくなりたいと思つている私です。

「書道部に入部して」

理学部一年 柴田亮子

まず最初に感じたこと、それは、部員のほとんどが男の人であったことです。このことに関して、私は、とても疑問を感じました。今までの私の少ない経験に於いて、書道に男の人は、無関心だと思つていました。それなのに、大学に入つて、こんなに多くの人が、書道をいろんな面から見つめています。とても、うれしくなります。最近、私自身、書道というものが、何だかわからず、深く追求していくといくほど、もうどうでもいい感じです。クラブの練習へ行つて自由に、伸び伸びと書いている先輩たちを見て、何だか、ホッとしました。書道というのは、自分のカラにとじこもりがちですが、先輩たちも、いろいろ、素直にアドバイスして下さるし、はじめのある中に、何か、なごやかさがある感じで、好感がもてました。

これからの私にとって、書道というものを、もつと大きく、自由に考え、未熟ながら、自分なりのものを見つけ出すために、大いに先輩たちを見習いたいと思います。

書道部に入部して、大学生活に、一つの希望が、持てた気がします。

自己否定から他者否定へ

経済学部三年 山村昌次

私は猫ではない。名前もある。音楽も聞けば、そう、人並みに恋もする。私は凡人である。しかし、凡人を好まぬ凡人である。

二十一年間、自分自身と云う最も馬鹿な相手と常時戦って来た私は、よく、ある種のジレンマに落ち込んで苦しみ、悩み、そして解決し、又ごまかして来た。そんな時、私は加害者としての自己である「自己否定」を行なう。それが解決の糸口となり得るかどうかは別だ。大学に入部してからと云うものは考える事の重要性を強く感じ、今尚、自分の考えの甘さに頭をたれてしまう。

サークルに於いて、あるいは学生生活に於いて考える事は必要不可欠の所産であろう。何故、何故、そして何故、私はすべての事に疑問を感じ、自己を追求したい。と同時に「他者否定」の重要性をも感じる。他者に対し、許しを与えるのは簡単で他者に対し厳しく

批判することは難しい。ここに於いて単に他者を否定、批判する事をやめ、自己否定に終わって寛大に許してしまふならば、すなわち自己否定に於いても甘く自分自身を許してしまふに違いない。他者否定こそすなわち、自己否定であり、自己成長であり、相互に理解しあえるものである。サークルに於いて、重要な事は他者を理解し、他者を認める事である。私はサークルは無論、個人の集合体であり、個性をのばし成長することでもあるが、サークル自体の活動として、サークル員全員が苦勞をし、またその苦を喜びとして均等に分かつべきであらう、と思う。私はサークル活動が、何らかの形ですべてのサークル員に還元され、かつ相互に理解することができれば幸いである。

「書道部に入つて」

経済学部一年 高倉 潔

ぼくが大学に入部して、先ず感じた事は、人間関係の疎遠さだ。ぼく達の場合、クラスが揃つて顔を合わせるのは一週間に英語の時間の二回だけだ。たまに英語の時間になつても全然知らない人に話しかける勇氣もないし、こんなことから、これでは友達をつくるきっかけがないと思つた。そんな訳で、ちょうど昔から書道をやつていたので、思い切つてクラブにでも入つてみようか、と思つて入部

した。クラブに入れば誰かいい友達が出来るだろうし毎日だらだらと過ごすよりはよっぽどましだ。入部するまでは、上級生との上下関係も随分と厳しいだろうと思っていたが、入部してみると、本当にいい先輩達ばかりで、その心配はいっぺんでなくなった。先輩というよりほんとうに友達という感じだ。この前も、ぼく達新入部員の為に歓迎コンパをやってくれたし、今日なんか、一、三年生の茶話会をしたばかりで、本当に色々面倒見てくれる。今は入部して、もう一カ月位なるが大部クラブの雰囲気にも慣れたところだ。先週は先生も来られて、ぼく達にとつて始めて指導を受けたが、なかなか好感の持てる方だった。ところで、これは入部して気づいた事だが、入部して人間関係を豊かにすること以外にもうひとつ大切な目的があった。それはあくまで書道部という部に入部したのだから、先生や先輩を目標として書を上達させることだ。今までは、しいて言えば「せまい書道」というものをやってみて来たような気がする。今まで自分の書いている方法が一番いいと思つて書いてきたので、入部して、今までとの違いに少し戸惑つたが、これからは、今までのものを徹底的に壊してしまつて、「広い書道」というものを学んでいきたい。そして書道だけは何が何でも四年間やり抜いて、大学でこれだけはやったという充実感を味わいたい。今思うことは、本当に書道部に入部してよかつたということだ。

書道部の中の自分

法学部二年 松本健一

自分は、中高時代、体育クラブに所属していて、卓球では県下には知れていたもので、練習なんかは厳しく、何度か退部しようと思つたがどうか三年間続いた。しかし、大学に入学して、中高校時代になかった自分の自由がほしいためにと書道部というサークルを選んだ。しかし、自分の想像以上に、福岡大学書道部とは甘くなく、大きくりっぱな部だった。入部して初めに驚いたのが、役職があつて、役員が直接、書道部というサークルを運営していることであつた。自分も中高校時代主将として、サークルを運営したが、あくまでも学校側の運営方針のもとにあつたにすぎない。

ここで自分なりのサークル論について述べたい。サークル論についても、高校時代のコーチの言葉がきているみたいだが、サークルにおいて自分はその一員であるという認識、自覚を持ち、自分は常に、何をしなければいけないかということ。そして、自分がやらなければというやる気のある自分を作り、サークルとは、個人、一人一人が動かしているものであると思う。

自分なりに福大書道部について言うと、入部した動機、目的は一人一人様々であるが、入部した以上は、自分は福大書道部の一員で

あるという自覚に一番欠けているのではないかと思う。これが、今後の課題だと思う。

しかし、自分は高校時代の部活動のことが忘れられずに一年間過ぎ、書道部員になりきれずに四月に退部してしまつた。しかし、自分にとって、書道部とは、想像以上にウエイトを占めていて、生活の一部になつてゐることに気づいた。そして、一カ月たつた現在、再入部して、生活の一部になつてゐる。やはり自分は、書道部が好きだ。そして、良き先輩達に逢え、書道部を選んだことを、今現在感謝しています。

新入生へ、書道部の一員となつたのですから、四年間、やめずに頑張つて下さい。君らが考えている以上に、おもしろいです。おもしろさを見つけて出すためにも、サークルを好きになり、お互いに頑張らましよう。

大学生になつて感じたこと

薬学部一年 宮崎 由起子

私にとって、高校とは狭い箱のようなものだった。そこからやつとのことで抜け出し、運よく大学生になつたわけだが、佐賀の片田舎に住んでいたせいか、井の中の蛙が外に出たのと同様、博多は言うに及ばず、天神でさえ一人立たされれば右も左もわからない始末

である。大学の講義が始まつて最初に驚いたのは、あまりにも人間が多いということだった。最近徐々に減りつつあるが、最初の頃の食堂の混み具合は、食事にありつけるまでに必死の思いをする程だった。そしてもう一つ驚いたのは、黒板ふきのおばさんまでがおられることだ。大きな黒板消しを使つているのが、滑稽にも見えたが、これまでやつていただくとはい、まいつてしまつた。小学生の頃は、トイレの掃除も当番でやらされたが、今は何と楽になつたことかと思う。また、今まで授業時間が五十分だったのが二倍近い九十分となりいつも時計とニラメッコ。なるべく遅く先生が来られ、なるべく早く終わつてもらいたいというも思う。講義終わりの合図の前に終わることがあるというのも、今までにはなかつたことで非常にありがたいことだ。今後も続きますように。その他に感じたことといえば、先輩後輩の間でよくあいさつがなされる。これは当然のことだと思つたが、朝など先生に生徒があいさつをしたり、廊下ですれちがう時、軽く会釈をしているのはまだ見かけたことがないが、それごく普通のことなのだろうか。それともそういう場面に出会つたことがないだけなのだろうか。私自身こういうことを言うのは、おかしいことだが、ちよつと疑問に思つた。講義を除くと毎日を楽しむ。下宿生活は初めてなので、夜などはよく同級生とお菓子を食べながらダベリング。まだまだ、食べることが何よりも楽しい。また、少ない仕送りの中で、一カ月を送るのは、とてもつらいことだ。伊藤博文様には誠に申し訳ないが、今ごろは千円札が紙切れに見えて

きた。今月もまた財政難に悩まされることだろう。とにかく大学時代は、四年で卒業することを目標に、その他高校では縛られて何もできなかったことなど、いろんなことに羽根を広げたい。そしてこの四年間に何か一つでも収穫物があれば幸いだ。

「私の書道観」

経済学部二年 上 田 浩 三

最初に一年間の反省を自分なりに考えてみることにした。

個人的には、入部した動機、ウエイトは様々であるにしろ馴れやいの中の自然に押し流された友達としての関係しすぎず表面的な面であり、義務的な面しかなかった。

突き詰めた話が出来ず、話をする時限が異なり、冗談の事務的な感じさえして終わってしまったような気分を僕は一年の時考えていた。具体的な例を話すとケジメに矛盾した計算してしゃべるクラブに対して裏切られた感じさえもっていた。

もつと書道に求めていく姿勢が必要であると痛感した次第であった。それから自分に取ってイヤな面を避けていたし、逃れようともしている当時の自分であった。

結論的に言う一年がなんとなく終わってしまったような気がして心残りがしたものだ。

それから去年は一年の交わりに積極性がなかった。また、だれでもスムーズに話が出来る明るい雰囲気になかった。あまりかた苦しい話になったので今度はリラククスして筆を運んでいきたい気持ちになった。九官鳥というものはカラスに似ているが、言葉が教える場合、例えば「ニイハオ」と、何度となく繰り返すうちに自然と言葉はもちろん声まで真似してくる。

僕は最初九成宮という鋭さで有名である臨書からやっていったのであるが、中国の古本を左側においたり、あるいは手にもって、じっくり観察して書いた訳であるが、やつと出来るようになった。その書道をやっていく経過と九官鳥の言葉を真似る経過を考えて見ると共通点があり、何だかおかしくなってくる。又、勉強をしている最中に、ハエなどが飛んで来て頭の回りを、うろろろする。乙新聞やノートで打ち殺したくなるが、それをしとめるまでの心境は真剣そのもので、他の事は何も考えられなくなる。しかし、ハイザラをこわしたり、ふすまを破ったりしない程度でおこうという気持ちは持つであらうけれども……

僕はその真剣さと何度となく繰り返し練習をすれば、書道は上達して行くと思うが、どういう結果になるか、やってみたことがないのでわからない。

僕の書道観はこのぐらいにして、僕はどちらかと言うと、アルコール万歳型であって、先輩や友達の下宿などに行つて、ウイスキーなどを飲んだり、ニタニタ笑つたりして、すごすことがたびたびあ

るが、次の日、頭がぼやけて授業時間が睡眠時間となってしまった
りする。

次に、僕の望んでいるのは、何事にも自然的に解けこんでいける
飾り気のない、素朴さが出来れば幸いだと思っている。

「書道部入部の動機」

経済学部一年 嘉村 浩 之

ぼくは高校ではクラブ活動は何もやっていませんでしたが、中学
の時は剣道をやっていたので、大学へ入学したら剣道をやるうと思
っていましたが、よく考えてみるとぼくは体は小さいし、体力もな
いので大学ではできないので、何か文化部へでもはいるうかと思っ
ていました。そうしたら西南大学の書道部にはいつている高校時代
の友人から、書道部へはいることをすすめられました。ぼくもまた
書道には少なからず興味をもっていたので、この際大学生活をただ
なんとなくぼんやりとすごすより、書道部に入部して、有意義な生
活を送ってみようと思ったからです。これには私の父の影響もある
のです。私の父は小さい時から書道がすきで、またうまくもあり賞
をとったことがあるそうです。それでぼくに大学へはいつたら書道
部にはいらなにかといっていました。また私の兄は会社員ですが、
やはり書道がうまいと何事においても得するから、今からでも書道

を習いたいといっていました。が、働いているとそれとできないので
やれるなら今のうちにやっていた方がよいという兄のすすめもあり
ました。

またもう一つ、つけ加えるならば、大学には友人が少なく友人と
いえは下宿の者たちだけだったので、もつとたくさんの友人をつく
りたかったからです。

「僕のサウンド」

経済学部四年 末 広 昌 徳

物音に目覚めると、そこは現実の世界だった。それまでは夢の中
に存在していた僕であったが、この瞬間、何らかの力でいつもと変
わらぬ世界に引きもどされてしまった。目を開けたまま、意識の中
で今まで存在していた僕を見つけようとするが、どうしても見つけ
出すことができない。目を閉じても同じ結果だった。素晴らしい世界
だったのに……。

だが、このように無意味な時を過ごすことは、僕には不必要だっ
た。何故なら、それに類する程の世界を容易に、しかも素早く創り
出すことが出来るから……。

それは何ら困難な事ではなく誰れにでも創り得ることのできる世
界、つまり、サウンドの世界なのだ。スピーカーから流れでる、さ

わやかですっきりした軽快なサウンドが、脳裏の何かしら霧のような物を取り去ってくれる。

喜怒哀楽といった人間の感情の全てを内包しているかのようなサウンド。サウンドとは、一体何だろう？ それは、言葉で表現し尽くすことの出来ない感覚的なものの様に思える。滝から水が流れ落ちる時のごとく、一定の響きを持ち、水量が変化することによって、様々な響きが生まれる。それは、雄大で神聖なものであり、我々の力では創り出すことのできない響きなのである。だからこそ、僕らは感動し、絶叫するのである。

最近僕は、そんなサウンドをソウルに求めている。従来のしめっぽいソウルとは異なつた、ナウで洗練されたソウルこそ僕の感覚にふさわしいものだと思ふようになった。黒人音楽の持つファンキーなフィリングを求めて旅する僕なのである。自分の求めるサウンドの世界に永遠に住みたいなー。……

そして、いつもと変らぬ世界で、いつもと変らぬ生活が今始まつた。

書道部に入って感じた事

人文学部一年 川原明子

私は、大学にある種の希望と夢をもち、この四月入学した。友達も全くなく（出身校のクラスメイトなし）、自分から進んで友達をつくる勇気もない私は、クラブに一縷の望みを抱いて書道部を選んだ。物静かで勧誘もあまりない。どの様な人間の集団だろうかとおズオズの体にて……先づもって人間関係が気になり書道の技術は二の次とこわごわ覗いた書道部入門……声をかけられるたびにオツカナびつくり。しかし先輩方の気おけない雰囲気になまなまづの一安心。良きクラブを選んだものと一人ニヤリ!!

そして一カ月。大学のクラブの真髄に触れた感にて少々のとまどいと（女子高から急に共学の世界に入って何となくギョチなさも手伝つて……）想像以上にすばらしいクラブの在り方、（人間関係がどのようにつくられたのか……）そして最も感嘆させられた先輩の技術の見事さ、（私も序の口までもはたしてたどりつくだろうか、不安のみ……）感心づくめの中にてまたたく間にすぎた一カ月。

その間、いろいろと良きアドバイスに支えられ、週二回が楽しみなとさえなりました。耳なれないコンパ!! どんな事なのか全く分らないままに敬遠。気もあまり進まず参加した茶話会……。こんな

にまで楽しいものとは知りませんでした。電車の中、バスの中、そして家の中で思わず一人笑いがにじみでる程の印象力!! この様にして、人間関係ができてくるのだらうと思いました。「とにかく入部してよかった」私の人生の契機になることを願っています。(一人っ子として育った私にとって何もかもが目新しい感)

伝統的に敷設されたであろう福大書道部の一員となり得た今日の幸いを機会に今後の精進を自分自身に約束し(苦手な文章を無理に書かされた時点で……)先輩方の心を心としていつまでも忘れ得ぬものにしたと思います。

「私の書道部」

法学部四年 石川 康 弘

月日のたつのは早いもので、もう四年目を迎えている。思い返してみると、私がこのクラブに入部したのは一年も終わりの十二月、その頃は、なかなか部員と話すことも出来ずに部屋の窓から下を眺めていたものだった。先輩から入部の動機を問われた時はやや答えにくかったことを覚えている。入部する時点において私は、別に目的もなく、単なる暇つぶしに入った。そのためか入部した頭初は暇さえあれば練習を一生懸命にやっていたものだった。しかし、時がたつにつれて私は自分なりの目的を見つけて、又目的を持って過ご

して来た。その目的は学年ごとに変化していた様です。他の人は、どんな目的があつてこのクラブに入っているのだらうと思つたが、別に尋ねることもなかった。ところで、私がこの書道部に入部して良かったなと思つたことは、友達ができたことです。友達といつてもその場限りの単なる親しい友もいれは、真の意味での親友もあります。私は、特別に書道が上手でもないし、でもこのクラブで親友に近い程の友に恵まれ、又得られたことを喜びと共に誇りに思っています。そして、親友とまでいなくても、先輩、後輩の関係においてもこのクラブに入つて良かったと思つています。私が役員になつていつ頃からかはわかりませんが、私の下宿に遊びに来るようになっていつ頃かには、時には、まだ眠りに就いている夜明け頃に來てみたり、酒飲みの帰りに來てみたりでした。それも今では楽しい思い出です。それに入部した頃はこわいと思つていた先輩や、余り話したことになかつた先輩とも親しくなつたし、私の場合、親しいというよりも人が見たら慣れ慣れしく、後輩が先輩をバカにしている様に見えたかもしれない。それほど私は先輩に対してものすごくきつい冗談などを言つていた様です。でも先輩は、そんな冗談などに対して怒ることもなく、たとえ怒つたとしても冗談めいたおこり方で少しも気にしていない様子でした。それだけに私も、先輩、後輩のけじめは考えていました。サークルにおいて、この様なことは、お互いがお互いの性格なり、気心の知れてない同志におそらく出来ないのではないかと思います。だから、私はそんなことのできた自分にこの

上ない喜びを感じると同時に、この様な人間関係が、サークルの良
い面又は本質のように思っています。だから私は、書がうまくなる
よりも人間関係を大切にしていきたいと思つてます。だからと言つ
て書道をやらなくてその人間関係だけのためにクラブを利用するの
でなく、人間関係を通じて書道をやっていきたい。そこで後輩に言
いたいことは高校とか大学を通じてできた友人は、大切にして欲し
い。そしてクラブとか下宿、寮を通じて一人でも多くの親友を見つ
けて欲しい。

福大！　そしてクラブ！

法学部一年　小　柳　智香子

幼い頃から福大を目の前に育つてきました。入つてよかつたのか
悪かつたのか全く見当つかず、というのが現状なのです。私にとつ
て大学に進学することは社会に対する逃避であつたように思えます。
私の高校生活は、あらゆる面において逃避の連続でした。そして、
今も……。何の為に大学へ行くのでしょうか？　今までだつて学校
が休みともなれば家に一人で居るだけでも楽しかつたはずなのに。
学問の選択の自由を与えられた私達学生は、実社会に出た連中に
比べれば勝手気儘なのかもしれない。ともすれば、それが退屈とい
う言葉に置き換えられるのです。ただのんびんだらり、これから四

年間足踏みしてばかり。

それは空虚感を私に与えます。こうしている間に皆なは前進して
いる。私には何の得柄もないことがとても淋しく思われます。残り
少ない十代に何かをやらなければ……。若いのですもの。何もの
にも直面しなくては。ここに私が全く経験のない書道をやってみよ
うという気になつたのかもしれない。部内に慣れきれないせいしか
まだ不安な事ばかりです。私には無理かもしれない。それでもやっ
てやろうじゃないか！

「私が求めたもの」

商学部四年　佐　野　正　実

一年の時から書道部に入部。何の為に入つたかと聞かれたらこう
答えるのです。もの足りない学生生活から脱したかつたと、どこの
クラブでもよかつたのである。ただ友達が欲しかつたのである。し
かし今、書道部に入つて本当に良かったと思つたのである。書道部に
入つていなければ、私の現在の地位、神様の座を得られていなか
つたのである。そして私にあげられる女性を困らせなかつたのでは
と、このようにしてクラブを卒業してゆくなら私は本当に、しあわ
せである。満足である。絶頂感を感じるのである。しかし、そう世
の中は甘くないのである。現在もより良き女性を見つけようと目を

書道部に入部して

経済学部一年 飯尾裕美

輝やかせているのである。今度の新入生、ほんとに女の人がいっぱい。書道部に入って本当によかったと感づるのである。満足である。絶頂感を感じるのである。こんな充実したクラブを卒業して行くのは、とてもいやである。人はもう一年よけいに居る！と云う。こっちはいやなのである。どうしても卒業したいのである。後輩にいいめられるのはいやなのである。みじめなのである。後輩が大切にしてくれば、もう一年よけいにいてもいいなと思うのである。連盟も行きたい、卒業しても行きたい。

この丸三年、私は？と考えるたび、やはり書道、これしか残らないように思われる。私が書道部について、身につけてきた書技は、やはり福岡大学書道部でしかダメなのであった。自分をとりまくクラブ、講師、先輩、同輩、後輩、このような人々の影響と指導のおかげなのである。自分でも未だ書道に対して疑問と矛盾を感じるのである。しかし今、このような事を考える暇はないのでは、と思う。昔の人の癖をまねしてでも、先生の作品を真似てでもうまくなりたいと感づるのである。

私が四年間やってきたこと、また、やろうとしていることは、矛盾の中から自分なりに学んできたものを紙にぶつけてみたい。これからはずつと心の安らぎと緊張感と絶頂感を求めて、このすばらしい東洋美術を学んで行きたいのである。

そして、このすばらしいクラブ、この中から社会に出て行く自分が、本当によかったと思うのである。

私が書道部に入部してまず最初に感じたことは練習前後、練習中の厳格さとはつきりしたけじめです。私は高校時代も書道部の一員でしたが女子校だったのでクラブの練習もさほどきびしいものではありませんでした。私語があちこちで満開なほど咲き乱れていても、それが耳ざわりに思えたこともほんの何回かで後は自分もその中にいたのが常でした。だからといって練習をなおざりにしていたわけでもありません。夢中になっている時は自分一人の世界で必死に筆を運んでいたものです。今クラブで練習の前後に行なわれている

「正座黙想」も高校の時の合宿などで何度かやったことがあります。大学のそれとは感覚的に心の縮りともいうものにかかなりの差異を感じます。女子校出身の私には全く正反対の男子の多い書道部の雰囲気は他の人よりも余計に心の緊張感を強めているようです。今の私にはそれが一番必要なようにも思えます。次に先輩方の新入部員に対する心配りです。大学に於いて大切なのは、人間関係だと思います。良き先輩方の御指導、御忠告をよく聞きこれからの自分の為に役立てるように努めたいと考えています。まだ入部してほんのわずかではありますが、これから先もつとつと「福大書道部」

をよく知り自分の書技向上と人間性向上に努め、又クラブの為に活動して大学生活四年間を有効に、かつ有意義に送りたいと思います。

茶柱が立った時

法学部三年 荒尾 記史朗

バラの五月も過ぎ紫陽花の咲く六月、私は今オスカーピーターソンを聴き冷めたいコーヒーを口もとに寄せた。久しぶりの雨がガラス窓を強くたたき、大地に切りこんでいく。今月から梅雨に入ったのだろう。昼間はポカンと突き抜けた青空にひばりが舞い上がり、自らの話を大声を出して囁づつている。田ではくしゃくしゃの布の帽子をかぶったお百姓さんが、田植の為の草刈と土を耕してるのが見えた。我々人間には肉体と精神とがあり肉体には限界があるが心は無限に深く広がり、肉体にはそれぞれの機能があり表だって見えるものと内部に備わったものがある。私達が創造するもの。全てはこういった機能と精神が結合されたものによって造られ、音楽にしろ映画にしろ絵画にしろ恋愛にしろこうしたものは種も仕掛もない。我々の手から頭から生まれ出てくるものだ。又このような創造物やこのような機能と精神を備えた人間の醸し出す個性に反応を示すものは、唯も凝うことの出来ない肉体と心である。ここで肉体と心は努力し鍛えれば鍛えるほどいろんな表現力が豊かになり反対に

いろんな心理や目のまわりの事がよりいつそうはつきり理解出来るようになるのではなからうか。非常に前置きが長くなったが私が言いたいのは、日ごろ生きている手ごたえを感じない日々を過ごしている連中が多いと思う。あわたたしいコミュニケーションの中で物質的によりよいもの、よりよい食事、お金と人情の血が冷えて無様な権利の主張、病的な人間関係の谷間にのめりこんで一人では息も出来なくなっている連中が多いように見られる。もっと大自然の變化、おおらかな気を持つてセンチになるような余裕のある気持ちがあるほしいものだ。常にお互いに甘えあっている人間関係と違い自然には、一切我々の甘えを許さない。しかしそれがゆえこそ海や山に相對した時に自分が生きていることの確実な手ごたえを持つているのではなからうか。どんなにわがままを言つても最後に泣いて頼めば命は救つてもらえるという人間社会の甘えの中ではしよせん我々は生きる手ごたえなど得られるはずはないのである。生甲斐の喪失ということをいわれて久しいがそれはとりもなおさずわれわれが甘えているということの証拠でしかない。短い文だけど非常によく批判された文であると思う。私達は、常に目的を持つてそれを自分の納得いくまで克服しようとする努力すれば苦しくても生きるよろこびが生まれ、生きている手ごたえがあり、何かを掴むことが出来るだろう。

「若い時」

経済学部四年 河野博之

青春とは何だろうか？ だれもこのことについて話し合ったり自問自答したことがあると思う。辞書的にいくと、青春とは年が若くて元気な時期となっている。

ある人が、「青春は人生のすべてである。青春を味わわない人間は死ぬために生まれてきたのであつて生きる為に生まれてきたのではない。」と言つていたけれど私もそう思う。若い時、どのように過ごしたかによつてその人の一生が決まるといつてもいいのではないだろうか。人それぞれ青春の過ごし方も色々ある。中学、高校を出るとすぐ社会の荒波にもまれ実践する事によつて成長していく者、大学に行く者は、教養や人格形成の専門的技術修得の為、課外活動を通して青春を楽しむ者といった型から、就職・結婚に有利、みんなが行くから行くといった付和曾同型まで様々である。

若い時はあれもこれもやつてみようと思ふものである。私もその一人であるけれど、へたをしようと、「二兎を追うものは一兎をも得ず」といったことになりかねない。私の場合、バイトを主体として考えるとどうしてもクラブとバイトの両立は時間的に無理がいくにもかかわらずなせ俺は書道部へ入部したのかと疑問がわく時があ

る。字はうまくないのに、みんなと比較したらいつも劣等感ばかり感じているのに……。クラブの雰囲気は自分に適しているから？ 「書」が好きだから？ 先輩、後輩いい人ばかりだから？ どれも正しいけどなによりもまず若者特有の昌險的な気持ちからではないだろうか、若い時こそいろんなことが経験、体験でき、そして傷つき、成功し、失敗し成長する。四、五十のおじさんから「若いといふことはいいなあ」という言葉を聞くことがあると思う。彼らもまたいふのである。私たちは若い、まだやること、したいことがいっぱいあると思う。青春を楽しく過ごそうと思えば、なによりもまずは行動、行動である。墮落した人間にならない為にも仕事や家庭に縛られない若いこの時に行動し、いいことを吸収し将来の為に自分の根元にはれるだけの根をはろうではないか。

「乱」

経済学部三年 大庭敏夫

学生にはいろいろな形がある。親に金銭的負担をかけずに自分自身で学費を稼いで一生懸命勉強している学生がいるかと思えば、ろくに授業も出席せず、親から仕送りしてもらつた金で、マージャン、パチンコに狂っている学生、気障な服装をしてサングラスを掛け、

タバコの吸い殻を教室だろうが、どこであろうともあたりかまわず捨てて足で踏みつける。その後を、掃除婦のおばさんたちが、一生懸命それの一つ一つ拾って掃除をする。一生懸命働いている。四十を越したようなおばさんたちが、生活するために、あるいは子供を育てるために……。バカな学生の吸った吸い殻を、授業にもできないのでらりくらり、親から送ってもらった金で遊んでいる学生のタバコの吸い殻を。試験の前だけ授業に出席して、ただ単位をとればそれでいいと言う学生。学問を学ぶための最高機関である大学の学生の姿だ。経済学部の学生でありながら経済に関して何も知らずに卒業する学生、四年間に何十万という金を学校に納め自分の専門を何も知らずに卒業する学生、この金はただ大卒という肩書きを得るための代償か。真に学問を学びたくても大学にいけない人がいるのに。自分の恵まれた環境に溺れているバカな学生。私はこんな学生にはなりたくない。大学四年間で何かを学びたい。もちろん自分の専門も。しかし大学生生活も後半になった今、自分はいったい何をしたのだろうか、何を学んだのだろうか。この二年間を振り返ってみてもこれを学んだというものが頭の中にはない。あせりと騒めきが始まる中で渦を巻いている。ただ、せめてもの救いがクラブに所属しているということだ。これでクラブに所属してはいなかったら救いようがない。クラブの中の一年の時の自分と現在の自分を比べてみると、かなり変わったように思える。やはり知らず知らずのうち成長しているのだろう。大学生活の自分のアルバムを開いてみる

と、ほとんどが書道部の写真で、うずまわっている。それだけ自分自身と書道部は切っても切れない縁になっているのだろう。しかしクラブが全てではあまりにも悲しい。クラブの一員である前に学生である。学生ならば学生としてのやらなければならないことがあるはず。大学生活の中で書道に所属していたということは良き思い出としていつまでも残るだろう。しかし学生生活としては何か足りない。大学は最後の学生生活である。社会にでると学生に戻ろうと思っても決して戻れない。一カ月以上の長期の休みも大学生活だからこそあるのである。この最後の学生生活を大切にしたい。せめてもの思い出にと長期の旅行を計画している自分だが……。

書道部に入部して

経済学部一年 高尾康弘

新入生勧誘週間の時のことである。僕は、最初から書道部に入ろうと思っていました。他の部に比較して、のんびりしているのか、ひっそりしているのかと心配していました。部の対面式では安心しました。控え目にしてこのぐらゐの新入生が入ってくるのは部が安泰であると確信しました。

私は中学時代に野球部に入っていました。そう言った観念の目で部室をのぞいた時、見事に覆されました。礼儀の中にも親近感を含

んだ空気が漂っています。その中にも少しの疑惑はなかったわけはありませんが、赤木師範の話によって一掃されました。私は大変納得し、部に入ってよかったと思っただけです。

自分なりに書道はなんとかやれると思っただけでしたが、文化会館に於ける先輩方の作品を見てると不安になりました。自分にとつてこれだけの物が作り出せるのだろうか。

これほどの師範の下で練習できれば少しは上達できるのではないかと内心期待なり喜んでいます。今部の実権を握る三年生の皆さんを見る時に強い連帯感を感じます。しかし先輩の言葉によると半分近く途中でやめてしまうということです。しかし時間的には大変苦しいのです。活動の日の次の日が英語、独語の場合はちよつと苦しい感じがします。家につけば疲れてしまつて意欲を失いがちです。活動によつては十時を超える日もありますが部屋へ行くのは楽しいし、一つでも身分の身につけることが出来ればそれでもいいと思えます。

大学に入つて

人文学部一年 増山紀子

中学、高校の六年間を女子校で育つた私は、大学に入って少し窮屈な思いをしています。というのは、まず、今までが女子校だった

ので、誰の目を気にすることなく友達とふざけあつたり、ばか話しかかりしていたのが、今では、その「わが良き友」は、皆学校が違つて、相手がいなくなつたのと、もし、その相手がいたとしても、男性の目が気になつてできないからです。だから、私の今一番の楽しみは、「わが良き友」達と会つて話しをする事です。まだまだ私（達）の精神年齢は中学生（あるいは小学生）並なのです。現在の私はまだ少し猫をかぶつているようです。おまけに、高校の時は何もクラブに入つてなかつたので、先輩・後輩の關係に氣を使う事がなかつたので本當に氣楽なものでした。でも、私は今クラブに入つて良かつたと思つています。練習や、先輩の人達に氣を使うのはちよつときついけど、今までになかつた何かを見つけたような氣がするのです。大学生活を有意義にしたいならクラブに入つた方がいいと、高校の時から聞いていたので、何かクラブに入ろうと思つていたのだけれども、最初は、書道部に入ろうなんて全然思つてませんでした。それが何故入つたのかと言うと、友達が入ると言つたことと、母が書道部だつたら喜んで許してくれたという単純な理由からなんです。だから最初他の人が書いてのを見て、下手な私は、ごく自己嫌悪にかかつてしまいました。でも、四年間頑張つて、少しでも他の人に追い着いて、追い越してやろうという闘志が現在私の心の中にめばえてきているのです。

福書連について

経済学部二年 野 端 富 継

「福書連」、正確には、「福岡学生書道連盟」であり、参加校は十一校である。その中に福岡大学書道部も入っているわけである。だから必然的に我々も加入しているわけである。よって福大書道部員イコール福岡学生書道連盟員となるわけである。しかしながら、この連盟について連盟自体を知らない人があまりにも多すぎることである。このことは連盟にとって最悪の状態である。連盟創立時は、こんなことは考えてもいなかったことであろう。皆が連盟行事に関して、関心を持ち、自ら進んで行事に参加したにちがいない。また他の大学の問題に対して真剣に考えたにちがいない。では今日はどうであろうか。はたして初心どりの目的に向っているのであるのか。否、今日の連盟は、予想以上の、欠点のみが浮き出ているのである。つまり、目的あるいは、初心とはまったく逆むきで進んでいるのであり、この間の傷口はますます広がっていくように思う。このようになる原因はどこにあるのだろうか。個人の無関心からではないだろうか。「連盟のことは事務局員あるいは、運営委員にまかせておけばよい。」などと思っている人が、あまりにも多い。そしてまた、自分達は書道部員だ。クラブには進んで入ったが連盟には

無理矢理入れられたなど思っている人が多い。たしかに連盟のことは事務局員や運営委員にまかせておけばよいかもしれないが、まかせっぱなしではいけないと思うし、たしかに、無理に連盟に入ってしまったかもしれないが、それでは、なんのために連盟が出来たのかわからなくなってしまう。もつと皆が原点に立ちもどって連盟がなぜ出来たのかを考えてほしい。特に福岡大学書道部はそれが一番欠けているといっても言い過ぎではないと思う。こんなことを言っているのは先輩方や役員の方に、しかられるかもしれないが、連盟創立校のくせして、又、自分達自身、連盟において重要な位置にあると言っているくせして、連盟のことは後まわし、ややもすると協力さえもしないことがままある。僕は福大書道部の事務局員であるが福大書道部に対して少々不満である。僕もクラブの役職につけばこの考えも変わってくると思う。でも僕は今は連盟のことに対して一生懸命やってみようと思う、また、たとえクラブを非難することになっても、もう一度、福大書道部の全員が連盟について考えてほしい。そして本当に福大書道部の連盟になつてほしい。このことを僕、福大書道部事務局員は、深く願望する。

南の二局で思った事

法学部四年 押越和則

やっと四年になりました、今は毎日マージャンに明け暮れています。私の三年間は書道部の事に明け暮れた様な気がします。私は書道部の物であり、書道部は私の物です。小さい事を云いますと嘘になりますが、過去三年間の大学生活はそうでした。私は法学部法律学科などではありません。実際法学部の事は全然知りません。私は学文会書道部の人間でした。外から観るとちっぽけな社会、集団である事はよくわかっているのですが、それでも、何処のサークルにも負けない立派なファミリーです。私を育てくれたのは河原由郎(失礼)先生でもなく、森三十郎(失礼)先生でもありませんでした。それは少しは恩になったかも知れませんが、そんな事は知った事ではありません。私を育ててくれたのは、書道部でした。この気持ちは、書道部生活四年目を迎えない事には味わえない感慨でしょう。私はどちらかと云うと過去の栄光にすがりたい懐古主義者の様です。

私の一年の頃は、それは面白い事の連続でした。朝、学校へ行く時は、満員バスに乗って、重い六法全書をかかえて行くのですが、教室には行かず、先づ最初に部室に行くのです。ドアを開ける瞬間

が、タイミングが難しいのです。勇気をふりしぼってドアを開けると窓際に四年生がずらっと並んでいて、昨夜のマージャンの話なんぞをしているのです。私が挨拶しても反応はありません。仕方なく、タバコでも喫うのですが、一年生なので公けには喫えないので、隅の方で、「メンタンピン、ドラドラ満貫!!」何のこっちゃという様な顔で横目で聞いているのです。確かに恐怖でしたねえ。でもすぐグロップとバットを持たされて、今の有朋会館の空地でソフトボールの練習です。昼前までやって第二ロイヤルで焼きそばの大盛りを喰い、ソフトクリームを喰い、七隈ファミリーボールに行つて、皆好会の練習です。そうそう「皆好会」もありました。昔は何でもコンバの前に天神であつたそうです。何としても残して欲しいです。ボーリングが終わると、よく体育館の地下でピンポンをやりました。汗びつしよりに帰つて来るなり、即、「正座」で練習が始まります。あばれた後だから思う様に筆が運ばずに先輩諸氏からよくしかられたもんです。先輩方は、私と同じぐらいあばれているのに、よくあんな字が書けるなあと思う事でした。そんなもつて、練習が終わると、丁度、私は田島に住みついておりましてバス通学でした。先輩方三、四人と天神方面に帰るのですが、田島では降りられずに天神まで乗つてしまふのです。そして新天町を通り、西鉄屋さんの地下に行き、味のタウンに着くのです。そして「因幡宇どん」を喰うのです。これが、知る人ぞ知る「因幡宇どんを喰おう会」です。もう誰れも知らないでしょう。ねぎと胡椒はタダなので力いっぱい

入れてえび天といなりを汗をかきかき喰って先輩方と別れます。が、私は下宿が田島なので、又バスで帰るのです。一人で帰るのは、一年生の私には寂しかったのですが、別に苦にはならず、どちらかというところがすがすがしい気分でした。帰りのバスの中で、私はいつも思っていました。いいクラブ、いい先輩だなあと……。

私は、まだ二十一年間しか人生をやっていませんが、人生は色々な人と人との出会い、邂逅であると信じて疑いません。接触する事によつて社会が成立し、集団が出来、組織が成立するのだと思います。書道部も一つの集団、組織です。もつともつと、人と人との触れ合い、縦横のつながりを大切にして、よりよい書道部を築きたいと思つていたところですが、今、対面に高めの「中」を放銃してしまいました。もつと練習しなければ……。

一 「出会いと愛」

法学部二年 黒田敦子

愛を語るほどたくさん経験も、考えもない。今の男と女との恋愛は、前に比べて多様で、また幅広いものである様に思う。人間は個人的存在であるので、他の者と関係なくして生きていくこととはできないし、また、男は男として、女は女として多様な関係、いろいろな状況のもとにおいて共同の人間性を担っている。これは、男と

女との「出会い」において深められるのである。ここで恋愛だけに限らず人間全ての理解、援助、いろんな自由な交わりによつて成立するのだと思う。「汝ありつつ、我あり」をまた、「我思うゆえに我あり」ではなく「汝あるゆえ、我あり」なのである。だけどこれは「我ありつつ汝あり」とも言い換えられる。これは、高校の時の宗教の時間の教えの中にあつたものであるが、人間は「出会い」の中でだけ他の者と共に生きていくことができるとも言えるだろう。

「出会い」の結びつきがある時は、愛に基づく結びつきである様に、また人格的出会いである様に。「出会い」これは、全ての人間関係に大切なものである。愛と言えはいろんな愛がある。今一番私達に身近な恋愛、いつも暖かく常にあるのが親子愛、母性愛、兄弟愛、それに教育愛、また友情も愛の一つであると言えるだろう。私が一番すばらしいと思う深い愛は母性愛であると思う。母性愛は、第一に無条件であるということである。第二に献身性であり、没我者であることこそ母性愛の美徳である。だけれどもよく考えてみると、弱点もある。盲目的であるということや、閉鎖的であるということである。母性愛の愛の対象は、我子だけなのである。これが、母性愛のもつ限界であるだろう。恋愛は、考えてみると相手の容貌とか、才能とか、価値に制約されやすい愛だと思われるので、相手は、現実的な価値や、可能性を見出しえない以上愛は、動き出さない。しかし母性愛は違う。我子のみに対する愛情は、子にもつ価値の一切を超えるのである。醜よりも美を、愚鈍よりも賢明を選びとる愛

ではないのである。我子が、肢体不自由児であろうと、精神薄弱児であろうと変りはないのである。この深い母性愛を、いつかは私も与える本能的愛を経験するのであるけれども、今からの何年間の大学生活の中において、母性愛よりもすばらしい心の揺れ動く恋愛をしたいものである。その為に、「出会い」というものを大切にしたい。愛のために……。

このクラブに入れたこと……これも「出会い」であろう。

私のサークル観

経済学部三年 南部 好孝

題には、私のサークル観と書いてあるが、これがサークル観と言われるかどうかかわからないが私なりに書いてみようと思う。私は書道部に於いて非常に変わった存在であるように思う。書道部に入部する動機が、一般によく言われる字がうまくなりたかつたから、また人間関係が欲しかったということである。まあそういう理由で入部して練習をしたが、なかなかうまく書けない。初めのうちは、一生懸命に練習していたが、人並みに書けない。それで一層練習をすれば良いのであるが、うまく書けないから書かないようになって、練習も非常に億劫になってきた。そして今までできたのであるが、今思うに熟、練習すればよかつたと思う。この様に書いているとあまり

真面目に書道部でやっていないように思われるようだが、私は練習もちゃんと出、サークル活動も積極的にやってきたつもりである。

サークルには、権利・義務があると思う。最低、それだけのことは果さなければならぬ。それ以上のサークル員の活動があつてこそサークルというのは発展していくのではないだろうか。サークルは人と人の集まりである。人、各々のサークルの置き方というものはあると思う。それは結構であるがサークル員各々が自由にやつてもらふとそのサークルはバラバラになつて一つのまとまりがつかないようになる。ある程度の束縛が入ってくるのではないだろうか。

好きな時に来て、自由にやるのは、ただ一つの好きな者の集団にすぎないのではないか。一人だけでも好きな放題にやつただめである。皆が真面目にやつてこそサークルはうまくいくのではなからうか。サークルは一人一人が構成員であるから、その一人一人がしっかりしなければならぬ。同じ様なことを色々と書いたようであるが、私の言いたい事は、サークルは甘くなくて厳しいということだ。

『学書』

商学部四年 宮崎 秀博

書を志す人には、実用的に書写能力を向上させんがためと芸術書道をなさんがためにするものとふた通りの目的があり、殆どの人は、

前者の目的を動機として書を習い始めたと思います。書は、一般の人達にとっては、日常の生活に必要な程度に事が足ればよいのであって、書写能力が整齐正確で、且つ敏速であり、能率的でさえあればそれでよいのです。即ち、実用書道は、一般の人々が社会生活の中で手紙を書き、日記を付け、その必要に應ずるだけの文字を書くことができるようになれば、一応その目的は達せられます。その書写能力について一般の人々が要求するところの第一事は、書蹟が明瞭であり、且つ平易で誰にでも読むことができ、またこれを書くのに、速かで実務上の役に立つことで、第二はその書が明瞭である上に優美で、相手に快適な印象を与えるということでしょう。しかし甚だ、醜悪でない限り実用書としては充分であり、必ずしも手紙や日記や文章の一つ一つが、優美高雅な芸術書たることが要求せられるものではありません。従つて実用書道は、これを学ぶ時、芸術書道とは、その手段方法が異り、書体は、楷・行・草に限定され、字體や書風の異なつたいろいろな書を学ぶより、簡易で、明瞭で、優美で、整齐で、実用向きなものを学ぶことになるでしょう。

しかし、実際にあたつてみると実用を目的として習っている人も大抵は無意識の内にその書が芸術をなしているように思えます。

逆に芸術書道を学書している人も自然と文字造形の原理原則を学び実用的なものも巧みに書けるようになると思います。

芸術書道の学習にあつて（実用書道も含まれると思いますが）誰もが第一になすべきは臨書であると思います。臨書もその目的を

自覚すればより早く上達します。その古典の筆使い、文字の形、全体の構成、墨色、この技術を身につけ、自分のものとして行きます。

ところで書の創作とは、字形や線質や全体を工夫して独特の新しい表現をする事です。独創と言つても、他の何ものの影響をも受けないでという事はまず考えられません。実際私達は日頃、絵画、彫刻、建築などの造形芸術に接していますし、直接的には何らかの書を見たり、それらの影響を受けたい訳にはいきません。言い換ればそれらの模倣や基礎なしに、書表現はできないとも言えます。結果的に出来上つた作品が別の書に類似していたり、前に書いたものと殆ど変りばえがない場合があります。となると創作とは言えないのではないかとという疑問がありますが、創作とは、自己の内面的な欲求にもとづいた表現活動の結果で、創作以前の体験は一種の教養であり自己の中に溶解していて創作の際に力を与えるものと思えます。となると先にも書いたように古典を学ぶことは、鑑賞力を高め感覚を磨き、終局の目的として自己の表現につながるものであらうと思います。我々は実用的なものを学ぶにしろ、芸術的なものを学ぶにしろ、その根底を成すものを、その根本を学ばなくてはならないのでしよう。

そして、前者も後者も言えることは、同じことを繰り返して練習することです。

部員のプロフィール

薬学部一年 穴見 美千代

宮崎県立小林高校出身。趣味は特になし。ただテニスとスケートがしたい。なんと言つてもスケートはえびのの自然の中でやるのがいい。ただし、滑れるのは風がある日に限るのです。

経済学部一年 飯尾 裕美

短所、短気なこと、少々忍耐力が乏しい、おつちよこちよいなこと。長所、単純なこと。趣味、レコード鑑賞（ポピュラー、映画音楽）詩をつくること、スポーツをすること、手紙を書くこと。

経済学部一年 高尾 康弘

毎日鳥栖より背振山をはさんで反対側の本学へ通っています。音楽は以前バイオリンをやっていたのでソフトな曲に傾きがちで、カーペンターズの大ファンです。

経済学部一年 高倉 潔

大分県立日田高校出身。今まで何をやっても三日坊主だったが、書道だけは小学校の頃から続けてきて、書道部に入学したのも好きで入った。

人文学部一年 増山 紀子

昭和三十一年六月二十日生まれ。私が好きなのは音楽を聞く事と、りりい（犬）と、○○さん。

薬学部一年 平川 雅章

生まれた時は良く覚えていて、看護婦さんの素敵な笑顔がまだ頭の中に。小学四年の頃、階段からころげ落ち現在の顔の形になりました。

商学部一年 八尋 厚子

何のとりえもありませんが、スポーツをやることと、本（漫画）を読むことが大好きです。どうぞよろしくお願いします。

理学部一年 柴田 亮子

高校時代は、いつもジーパン、シャツスタイルでとても男の子らしかったのですが、なぜか自分なりに反省して、最近少々女らしく？ なったつもりです。

人文学部一年 川原 明子

幼い頃より音楽の道を志してピアノ十年、どこでどう間違ったのか、教育大附属中に入学したのが運のつき、中途にて座折、学習に転じて現在に至る。

経済学部一年 中島 恵子

津島恵子さんに似て大和なでしこの代表で、「虫も殺せないようなお嬢さん。」と言われました。人前では、大和なでしこ、家に帰れば、弟とはり合う「お山の大将」

経済学部一年 嘉村 浩之

特技は、剣道と倒立ができるくらいで、趣味としては音楽鑑賞

で、現在マージャンに凝っています。

薬学部一年 宮崎 由起子

只今十八才の女の子、この前中学生とまちがわれたため、ヘアスタイルを変えるなどこれでも本人必死なのです。

経済学部一年 高田 直記

大学に入ったからには……と思いつながらもようやく大学生活に慣れて来て、慣れの次にはダレが来る。ダレから来るのが無気力、無感動、無関心、無意欲のダラリ、ダラリのダメ男。

経済学部一年 山下 真由美

郷土は下関ですけど、現在天神っ子の私です。いつでも我庭で
ある天神へ遊びに来て下さい。

経済学部一年 安達 健一

僕は書道の大名人とよく言われるが、その必技は必殺鉄クギ流、
福大書道部を潰す会の回し者ではないかとも言われる。

法学部一年 小柳 智香子

我ままで、泣き虫で、することがルーズで、中途半端で、すぐ
にむくれちゃう私です。がそんな私に愛を……いつまでも純粹
な心の持ち主であるといわれたい私です。

法学部一年 結城 健

ひまはあるが、金がなく、言う事は大きい、きもったまは小さい僕。でもいいのです、僕の心には、いつも溢れんばかりの愛があるから。

商学部一年 堤 寛

十月十日の試験に鍛え、汽車にゆられて何千里、長いトンネル
ぬけたなら、着いたところが福大！

経済学部二年 野端 富継

書道部のハジさらし。特技が人を好きになること、特に女の子が。趣味、女にふられること、今までに十三回ふられている。利点、ハジをもたないこと。

人文学部二年 鹿田 美恵子

昭和三十年十一月四日に生まれました。なんとなく福大におちつき学業におわれる毎日で、遠い所から電車とバスにゆられ部屋にも来てます。

法学部二年 高倉 孝文

昭和三十年朝倉郡杷町生まれる。七月二十三日で満二十才！
名門浮羽高校合格して後学業に勤しむ。そして現在に至る。

法学部二年 徳重 行隆

昭和二十八年四月二十九日出る。千八一四 山口県小郡町大正
上 ○八三九七―二一五七一六 死んだことなし。

法学部二年 黒田 敦子

好きなことはフォークが大好き。モッカ「グレープ」に夢中。
淋しい静かな曲が好きで失恋の歌なんか我身にしてみても……他に
テニスすること、中高時代とテニスし続けて急にやめたせいか近

頃は太りぎみ、現在の最大の悩み。

法学部二年 松本健一

いついかなる時も、常にニコニコそば屋の健ちゃん

商学部二年 上田浩三

読書の好きな静かな男。今読んでいるのは、こまわり君です。

経済学部二年 永野雄二

特技、やり投げ、円盤投げ、そして女・女・女。

法学部二年 原田直子

何のとりえもない、我ままな娘です。

法学部三年 荒尾 記史朗

私の好きな物、酒と女。しかしいつも入るのは酒だけ。

経済学部三年 板倉 義男

書道部きつてのスーパーマン。人はハリマオと呼ぶ。いつか幹

事をひきずりおろそうと想っている私である。

経済学部三年 伊藤 有三

書道部にいて常に独り孤独を背中に残し、今日を、明日を夕陽

のように過してゆく男一匹。

経済学部三年 入江 美智子

私は宇美という所になぜか生まれてしまいました。近くに刑務

所もあり、もしよかつたら一度来られたらいかが？

商学部三年 内野 俊彦

私は本土という国で取れました。家の前はビルが建ち並び、日
かげで育った今の体、どうぞよろしく。

経済学部三年 大庭 敏夫

ただ今三年、役職は会計をやっている。つまり金を取り扱って
いるわけだ。私の生活は裕福ですゾ。

工学部三年 金本 雅一

先日沖繩へ行つて来ました。とてもきれいでした。

法学部三年 佐藤 一俊

一言、ザ・キャバレーマン。頭の中にはいつもキャバレーのあ
の娘の事が。

人文学部三年 隅田 ひとみ

私をソロバンでいれると、願ひましてはやさしさ五十五円、若さ

三十五円、強さ十円。でも友達が良いので三円高の女の子です。

商学部三年 田中 博美

私の名は周ちゃん。何故か書道一筋。女を全く寄せつけない。

いや、本当は……。

経済学部三年 南部 好孝

書道部きつての好物、その名は好ちゃん。好きな言葉、金もな
いの、金がありすぎてこまると言うこと。「ただいま恋愛中」

薬学部三年 永田 すみれ

鉛にもまけず、風邪にもまけず、試験にも、実習のレポートに

もめげず、細胞の退化現象におびえつつも励んでおります私。少年に大志をノ 少女に大恥をノ

法学部三年 神代 祐子

久留米の田舎からかよつてます。大牟田線の花一輪です。

法学部三年 萩本 洋子

私がヨコノ 浜へ帰らず七隈で、今じゃ自炊の貧民生活。体に影響ないのは何でかな？

経済学部三年 山村 昌次

一見考えるような男、よく見ると全てダメな男である。と板倉君が言っていましたよ。

経済学部四年 末 広 昌徳

『ビューティフル・サウンドを求めて放浪の旅を続ける僕。こんな僕に、そつと寄り添ってくれる女性がいた。』……と日記には書いておこうノ

経済学部四年 合 谷 良平

出身、北九州東筑高校。あまり話す事がきらいなもの静かな男。いつも空間と線とテクニクの三要素を基本として精神力で書に取りくんでいる。四六四九。

商学部四年 佐野 正実

今でもクラブに通っている一見まじめ人間。書道に全神経をくばり、ホンの少し女と麻雀にノ 人生は楽しいなノ

法学部四年 石川 康弘

私の名前は五島のどん百姓、昭和二十八年の五月三日に五島で生まれました。でも本籍は鹿児島であります。中学、高校と剣道をやりスポーツは大好きです。

経済学部四年 河野 博幸

「国宝の里」として世界中の人々に知られている国東半島出身の純粋な田舎つべ。旅行するときには一度は我が里へ行ってみちよおくれな。

理学部四年 村田 博治

大学に入って四年間たつても勉強だけはますますいやになり、一生寝て暮らしたいと考える今頃であります。

法学部四年 押越 和則

夜の中洲ってどんなところだろう？ 一度でいいから行ってみたいネオン街。

商学部四年 宮崎 秀博

失恋の痛手に耐えかねて、ハッサリ髪を切りました。自称、昔原文太。他称、ルパン三世。

経済学部四年 山本 登

六本松の寮長、ここに健在ノ
法学部四年 松田 幸人

クラブで一番真面目な男。
何事にも真剣に取り組んでいます。

明治家ベーカリー

パンとケーキの店

明治家

御贈答品などは
製造直売のケーキで

TEL 531-4598



ティー・ルーム

メイジ

待合せなど気楽で
くつろげるヤングな店

TEL 521-3667

西鉄高宮駅前

福岡市西区西新ユニード通

珈琲 サントス

TEL 841-1917

誠実信用

日本分譲住宅協会員・西日本住宅産業信用保証・九州分譲住宅(株)

福大生専門・総合不動産センター

油 山 地 所

代表者 波多江 茂 樹

福岡市西区友泉亭 TEL 871-0237(代)

学割の店 福大より歩いて 3分

メガネのミヤモト

七隈四ッ角バス停横 TEL 801-5830

祝 荒鷲発刊

七隈ファミリーポウル

福岡市西区七隈11(福大横) TEL 861-5555

時計・宝石・貴金属

大島宝飾店

七隈四ッ角バス停前 TEL 801-0039・861-5085

早い、美しい、安いスイスドライ

佐伯クリーニング 友泉支店

TEL 761-1277

音楽を売る店

黒木レコード店

福岡市西区友泉第二バス停前
TEL 871-3229

BIG-JOHN BOBSON CACTUS LEVI'S
修正無料、3分仕上げ

◎パンセンター

大川衣料

(友泉亭店)

友泉第二バス停福大ヨリ

☎ 862-2730

新しい希望 あなたもコンタクトレンズに かえてみませんか

眼にメニコン



コンタクトレンズを装用したいけど……「目がいたくないかしら？ゴロゴロしないかしら……」と迷っているアナタ——
さあ、お気軽におたずね下さい。コンタクトレンズは目にピッタリフィットするアナタだけのもの。装用している事が他人にわからず肉眼と同じ位の視野が得られます。
明日からの新しい希望の為に——あなたもコンタクトレンズに、かえてみませんか……



東洋コンタクトレンズ株式会社

〒810 福岡市中央区天神3丁目1番16号橋口ビル

☎092(771)6681(代)

規則

第一章 名称及び目的

第一条 本部は福岡大学学術文化会書道部と称し、本学学生による書道愛好者の団体である。

第二条 本部は部員相互の親睦融和をはかり、人間形成を旨としと共に書道文化の普及、書技の向上を目的とする。

第三条 本部は前条目的を達成するために次の事業を行なう。

- 一、書道に関する事業
- 二、書道に関する調査研究並びに機関誌などの刊行
- 三、関係諸団体との親睦ならびに連絡提携
- 四、各種展示会出品
- 五、その他前条目的達成のため必要と認めたる事業

第二章 組織

第四条 本部は講師及び部長各一名を置く。

第五条 本部は幹事、副幹事、会計、企画、庶務、その他必要とする役職を置き、本部を代表する。

第六条 本部は次の機関を置く。

- 一、役員会
- 二、部員総会

一、OB会、旧OB会規約は別に定める。

第三章 役員会

第七条 役員会とは、部の円滑なる運営を期するための機関である。

第八条 本会は原則として、第五条に基づく役員によって構成される。但し、第五条に基づく役員以外であっても幹事が認められた場合には、本会に出席することが出来るが議決権はないものとする。

第九条 本会は幹事によつて召集され代表される。

第十条 本会は毎月一回以上開くことを原則とする。

第十一条 本会の議決は、部員総会の決定を妨げるものではない。

第四章 部員総会

第十二条 本会は本部の最高議決機関である。

第十三条 本会は本部の部員によりこれを構成する。

第十四条 本会は必要に応じてこれを開き、幹事がこれを召集する。

第十五条 本会の議長は原則として、幹事がこれを兼務する。

第十六条

- 一、本会には部員の過半数を以つて成立する。
- 二、本会会の議決は出席者の過半数の賛成を必要とし、可

否同数の場合、幹事がこれを決定する。

但し、出席者の過半数の賛成で重要事項とし、その決定には、出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十七条 本部会不成立の際、出席者の三分の二以上の賛成を以つて仮議決することができる。但し、

一、仮議決については事後部員総会に於いて過半数の承認を必要とする。

二、重要事項は仮議決することはできない。

第五章 役員

第十八条 役員構成は第五条に同じ。

第十九条 第三条に基づき、外部関係諸団体へ役員を派遣することができ。

第二十条 幹事は本部を代表し、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその職務を代行する。

第二十一条 本部の役員改選は選挙制にし、これを重要事項と認め部員の無記名投票による選挙を行なう。

但し、委任状は認めるが、委任の方法は年度によつて異つても良いものとする。

第二十二条 本部の役員の任期は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

但し、役員改選後、翌年三月三十一日までは代行期間

とし、その責任は新旧役員の連帯責任とする。

尚、欠員が生じた場合これを補充する。

第二十三条 役員改選は原則として十月に行なう。

第六章 役員 の 職務

第二十四条 役員 の 職務 は 次の 通り である。

一、幹事は部務を処理し、部を統括する。

又、部の代表責任者であり、その責任を学術文化会と部全体に負う。

二、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその任務を代行する。又、福岡大学書道部OB会の事務を担当する。

三、会計は部員徴収並びに部費予算に関する収支の記録決算書を作成。

四、企画は第一章第二条に定められた本部の目的にそつて諸活動を企画する。

五、庶務は本部の活動に必要な諸事務を行ない、資料の徴収保管をなし、機関誌の発行を行なう。

但し、機関誌の発行は年一回以上とする。

六、第五章第十九条に基づき役員は、本部関係諸団体との親睦融和を図り部の向上を目指す。

第七章 会 計

第二十五条 本部の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第二十六条 本部の部費及びその他の所定納入金については、前年度末に部会に於いて決定しなければならない。

第二十七条 会計報告は会計が行なう。又、部員の要求に応じて会計簿を公開し、年一回決算報告書を作成し、これを報告する。

第八章 部員の権利義務

第二十八条 本部の部員は次の権利を有する。

一、 本部のあらゆる活動に参加し、人間形成の場として利用すること。

二、 本部の部員総会に出席し、その議決に参加すること。

三、 本部に於ける選挙権、被選挙権を有する。

四、 本部の備品及び図書を利用すること。

第二十九条 本部の部員は次の義務を負う。

一、 部員は部員総会に出席すること。

但し、やむなく欠席する者は事前に欠席届を幹事に提出しなければならない。

二、 部員は部費その他の所定納入金を定期に納入すること。

三、 本部の規約に従うこと。

第九章 入部・退部

第三十条 本部の入部は年度始め募集することを原則とし、学生会登録及び入部金納入を以って部員とする。

第三十一条 本部の退部は書面を以って幹事に願ひ出て、役員会の承認を得、部員に通達する。

但し、退部を希望する者は、その在籍期間までの所定の納入金を完納する。

第十章 罰 則

第三十二条 書道を研究する熱意なく本部の名譽を汚したる者、部活動を理由なくして一ヶ月以上怠った者。又、部の秩序を乱す者は部より除名する。

但し、欠席届提出者についてはこの限りではない。

第十一章 規約改正

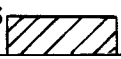
第三十三条 本部規約改正の発議は部員総会に於いて部員の四分の一の同意により総会の議決を経て行なわれる。

尚、改正においては、本部員の三分の二以上の出席を必要とし、その出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

附
一

附
則

本規約は、昭和三十五年十一月一日より実施、昭和四十五年四月一日改正。

| | | | | |
|--|-------------|----------------|--|-----------------------|
| 東 七 隈 | ↑ 福 大 | ヤマエ石油 七隈S/S |  | 七 隈 四 ツ 角 |
| <p>日本石油特約店</p> <p>ヤマエ石油株式会社</p> <p>七隈給油所 TEL(801)3311</p> | | | | |

△ 編 集 後 記 ▽

※ 十五週年記念号というので部員の種々様々な思惟を載せることを企画しましたが、原稿の収集ができず全部員とはいかなかった事を残念に思います。

※ 機関誌発行にあたり御協力戴いた方々へ心から感謝致します。

※ 第三十七年度卒業の松田詔年先輩が五月二十六日他界されましたことをこの紙面をもって御報告致しますと共に御冥福をお祈り致します。

荒 鷺 第十六号

福岡大学学術文化部会 書道部機関誌

昭和五十年七月発行

編集責任 板倉 義男

萩本 洋子

印刷所 福岡市中央区大名二丁目七番二号

福岡 タイプ

TEL (七七)一六〇四